

院内新規就労者に対する就労支援の取り組み

～ワークサンプル幕張版を用いた職能評価と環境調整が有効であった一例～

- 石川 篤 (東京慈恵会医科大学附属病院 リハビリテーション科 作業療法士)
- 松木 千津子 (東京慈恵会医科大学附属病院 リハビリテーション科)
- 安保 雅博 (東京慈恵会医科大学 リハビリテーション医学講座)

1 緒言

当院では、人材派遣会社と連携を図り、各対象者に合った就労をサポートする独自の体制を構築し、第26回発表会にて報告した。今回、当院の就労支援システムを活用し、派遣先での就労に至ったが、さらなるステップアップを目指し、当院の事務職に就職が決定した症例を担当する機会を得た。職場定着を目指し、就労前後を中心とした支援を実施し、良好な経過をたどったため以下に報告する。なお、発表にあたり本人より了承を得ている。

2 当院の就労支援システムについて

就労を希望する場合、まずリハビリテーション医の診察を受ける。医師による判断のもと、次に療法士による評価を実施する。その後、人材派遣会社とのカンファレンスが開催され、派遣先企業へ紹介となる。試用雇用後に企業へ転籍となるが、派遣中にうまくいかない場合は、別の企業に再挑戦することも可能となる。このシステムの特徴は、①人材派遣会社に籍を置くため、試用雇用時に給与が発生すること、②万が一、試用雇用中に困難が生じた場合にも離職は免れること、③医学的な視点でのサポートが可能な点である。課題点として、派遣会社と連携する際、職能評価が不十分である点、職場への小まめな支援が困難である点、指導係への支援が不十分である点などが挙がっていた。

3 症例提示

症例A (50代女性 右利き)

【診断名】脳出血 右片麻痺 失語症

【経過】X年、脳出血を発症 (図1)

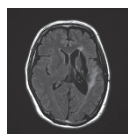


図1 MRI

X+1年、上肢麻痺の治療目的で当院紹介受診となり、作業療法 (以下「OT」という。)・言語聴覚療法 (以下「ST」という。)を開始。就労支援では、人材派遣会社と連携を図り、デスクワークの仕事に派遣先が決定した。派遣社員を経て契約社員となり3年間従事した。業務はPCの入力作業を中心に行っていたが、通勤時間の問題と業務内容の負担もあり転職を希望した。X+10年、当院事務員 (障害者枠) への就職を希望し、内定が決定した。そこで、OTにて詳細な職能評価の充実を図るためにワークサンプル幕張版 (以下「MWS」という。)を用い、また指導係を含む職場の環境調整を開始することとなった。

(1) OT 評価

心身機能・身体構造：重度右片麻痺 (BRSⅢ-Ⅲ-Ⅲ) であり、書字やPC操作などは左手にて行う。高次脳機能面は、軽度流暢性失語を呈しており、錯誤の多い発話のみられた (表)。

活動・参加：ADL・IADLは自立しており、T字杖歩行にて公共交通機関の利用も可能であった。MWSでは、指示理解による正答率の偏りが見られた。正答率が高い項目は、質問を繰り返すため作業時間がかかる結果であった (図2)。また、作業工程が多い課題では精度が低下し、指示の出し方など工夫が必要であった。

環境因子：独居。身体障害者手帳1級。当院は高次脳機能障害者の雇用経験なし。

個人因子：元体育教師。前職のデスクワークでは、本人の苦手である数字を用いたPCの入力作業を行っており、周囲に聞きながら仕事をしていた。職場までの通勤時間は約1時間半程度。病前は社会的で人と接することを好んでいた。

(2) 評価のまとめ

仕事に対する意欲も高く、生活リズムの獲得もできていた。職能評価では、作業は丁寧であったが、指示理解の精度にムラが見受けられた。また、当院は高次脳機能障害者の雇用経験がなく、障害に対する周囲の理解を深めるとともに、指導係へのフォローアップが必要であった。

表 WAIS-Ⅲ結果

全検査	IQ93
言語性	IQ90
動作性	IQ98
言語理解	99
知覚統合	106
作動記憶	65
処理速度	75

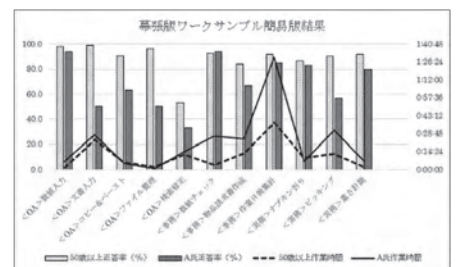


図2 MWS簡易版結果

4 OT 介入

(1) 就労前の情報共有

就労前に当院の指導係と情報共有を試みた。主な内容は、①医学的評価結果の共有、②職能評価結果の共有、③個人特性の共有を行い、加えて、④高次脳機能障害についての一般的な症状と対応策の提示、⑤指導係が想定している業務内容の確認を行った。④については、指導係より「どの

ような障害なのか分からない」との意見が聞かれたため、高次脳機能障害者に関する一般的な病状の説明を行い、理解を深めてもらった。また⑤に関しては、指導係が想定している業務内容をOTが実際に現場へ向う確認した。業務内容は電子カルテにスキャンされた書類に不備がないかを確認する作業を想定しており、作業速度を求められるものではなく、正確性が求められる仕事内容であることが分かった。現場で得られた情報をもとに模擬練習を行った。

(2) 就労後のフォローアップ

就労後も定期的なフォローアップを実施した。現場にOTが出向き仕事場面の様子を確認した上で、A氏との面談、指導係と職場上司との情報共有を行った。指導係からは、「一度言ったことが伝わらず、何度も修正が必要」との情報があったため、名前を呼ぶ、肩をたたくなど注意をこちらに向け、その後なるべくゆっくりと短い情報量で指示を出すように助言した。また、重要事項はメモに残し、確認のため指示内容の復唱をするように伝えた。

5 就労後の経過（結果）

仕事内容に関するミスは軽減し、周囲との会話も行えるようになっていった。指導係からは、「仕事はできるようになってきている」「次のステップに進めていきたいがどのタイミングで行ってよいか」などの前向きな意見をもらう一方、「周囲との会話をする際は手が止まってしまう」との意見も得られ、失語症による症状の特徴などを改めて確認し、就労後も継続的に職場環境の整備を進めていった。また、A氏は元々体育教師であり、「人に教えること」に価値を置いていることから、後々は仕事を新人職員に教える係などの業務提案を行った。

6 考察

今回A氏に対する就労支援を通じて、職場定着を目指すには、以下の三点が重要であると考えている。

(1) 詳細な評価の重要性

職場定着を図るためには、企業が求めている人材と採用した人材の能力の乖離を最小限にすることが求められる。企業側が求める情報としては「仕事の適性（得意・不得意）」が上位に挙がっており¹⁾、その点を踏まえ、職能を中心とした包括的な評価を行う必要がある。またその際に「どのようにしたらできるか」という視点で情報共有することが望ましい。A氏に関しては、前職に就いた際は、数字の処理が苦手であるという情報は提供したが、実際にどのように作業を行えば精度が向上するかまでの提示は不十分であった。今回は、その点を踏まえ、MWSを用いることで実際の事務作業に即した詳細な評価を重点的に行った。それらの結果をもとに直接指導係と具体例を交えながら情報共有を行うことで、より円滑に業務内容の選定、職場環境の設定が可能となった。

(2) 支援体制の重要性

本症例は院内に就職したことにより、小まめな支援を行うことができた。問題が生じた際に指導者と連絡を取り、必要に応じてOTが現場へ向う助言を行う。高次脳機能障害の場合、問題が生じた場面での振り返りが自己認識を高めるため、仕事をしながら自己を振り返る機会を得ることは当事者にとって非常に有効であった。医療機関での就労支援においては、現場へ向う支援（外出訓練）は困難である。そのため、現場へ向う就労支援するには職場適応援助者制度の利用が望ましい。しかし、関係性が取れていない支援者が職場に入ってくることに対するストレスを訴える報告もみられ²⁾、利用を躊躇してしまう場面もある。今回の場合、リハビリテーションを担当しているOT・STが就労支援も行うので、関係性がすでに構築された状態での関わりは非常にスムーズであり、また症状や個人因子など多岐にわたる情報を持っていることで、より精度の高い助言を行うことができた。

(3) 指導係に対するサポート体制の重要性

高次脳機能障害は、「高次脳機能障害支援モデル事業」をきっかけに社会制度が整備され、世の中への啓蒙も進んできている。しかし、依然として「稀な疾患」というイメージが拭えない。そのような状況の中、障害者雇用が促進されることで、指導係の負担が懸念される。最も対象者に近い存在である指導係に対し、障害理解や対処法などの知識提供はもちろんのこと、気軽に質問ができる体制の提供が不可欠である。今回は、指導係や職場上司を巻き込み、障害特性の説明や具体的な助言を頻回に行った。指導係からも「これは症状によるものか」という問い合わせもみられ、気軽に疑問を解決する体制を整えることができた。今後も指導係を中心とした職場環境づくりの手助けを行い、ナチュラルサポートの形成を心がけながら、職場定着が行える環境を作っていきたい。

7 結語

今回は当院に就職した障害者に対する就労支援であったが、今後は人材派遣会社へ紹介する前の「現場実習の場」として、院内の環境を用いた支援体制の構築を検討していきたい。また、障害者雇用の際に、OTが事前に詳細な評価に基づく職種内容のマッチングに貢献することができるのではないかと考えている。

【参考文献】

- 1) 高齢・障害・求職者雇用支援機構 編。高次脳機能障害の復職における職務再設計のための支援。2018
- 2) 高齢・障害・求職者雇用支援機構 編。ジョブコーチ支援の実施ニーズ及び関係機関から求められる役割に関する研究。2014

【連絡先】

石川篤 東京慈恵会医科大学附属病院・リハビリテーション科
e-mail : orangememory.ishikawa@gmail.com